

## (菌類)

菌類は植物、動物と並ぶ大きな分類群で、一般にキノコ、カビ、酵母として知られている生物、また広くは変形菌あるいは粘菌として知られている生物をも含むが、ここでは選定の対象を肉眼で観察できる大きさの子実体（胞子を形成する器官）を作る菌類、いわゆるキノコに限定し、カビや酵母、変形菌は対象外とした。キノコは子実体によってその存在の状況（絶滅あるいは絶滅危惧など）を比較的認めやすい菌類であるが、子実体は発生期間が限られ、またその発生も気象条件やその他の環境条件によって左右されることから、短期間の調査ではその存在を詳細に把握することが一般に困難である。従って、ここでは県内における過去の発生確認実績をもとに以下のような基準を設けて種の選定を行い、ランク付けを行った。

### (1) レッドデータブック掲載種の選定

#### 種の選定基準

種の選定にあたっては以下の点に留意した。

- 1) 正式な和名・学名が付けられている種を基本的に選出した。
- 2) 肉眼的同定が可能なものは、その写真が残されているもの。肉眼だけで同定出来ないものは、その顕微鏡写真が残されているもの、若しくは標本が残されているものを選定した。
- 3) その場所、その地域に安定的に（数年サイクル可）発生が確認されるものを選定した。（一部例外有り）
- 4) 菌根菌（植物と密接な関係の有る菌）を主な貴重種とし、腐生菌（植物などを分解する菌）は少数にとどめた。

#### 分類

DNAの塩基配列解析に基づく分子系統分類の進展により、現在従来の分類体系が大幅に変更されつつある。しかし、この新しい分類体系はまだ一般的に広く採用される段階には至っていない。従って、ここでは混乱を防ぐため「原色新菌類図鑑Ⅰ・Ⅱ」（今関六也・本郷次雄編著：保育社、1987,1989）で用いられている分類及び学名をベースに、若干の更新を加えたものを採用した。

#### 種の解説および日本国内の分布

上記の「原色新菌類図鑑Ⅰ・Ⅱ」を主な参考文献とし、分布については「北陸のきのこ図鑑」（池田良幸著：橋本確文堂 2005）および県あるいは地方単位でのこを取り扱った図鑑類も参考とした。

#### 種の選定作業

長期にわたって県内のキノコの発生を調査したデータがないので、県内で活動しているアマチュアキノコ研究家の連携組織である「兵庫きのこグループ」と「兵庫きのこ研究会」、「関西菌類談話会」、「三木キノコ研究会」の有志及び「兵庫県の林業担当職員」の協力のもと、集約されたデータを再検討し選定作業を行った。

種の分布調査について

協力者各位は精力的に県内の菌類分布調査を行っているが、調査者数が極端に少ないため、県内を網羅した情報とはなっていない。また、地下生菌や虫草類は調査者数が少ない上に発見の機会も極端に少なく、情報不足は否めない。

## (2) キノコ調査の難しさ

キノコの子実体を植物に例えると花に相当し、植物では葉や茎あるいは幹・根にあたるキノコの本体は、地中や不朽木・腐植層など目立たない場所に存在する。その結果、多くのキノコの場合、その存在が確認できるのは子実体が発生している（すなわち花が咲いている）わずかな期間（硬質菌等を除く）だけである。また、毎年同時期に発生する種も有れば、数年サイクルで発生する種もある。キノコの完璧な発生状況を確認するには、長期にわたって県内すべての地にくまなく調査員を貼り付け、2～3日に1度の調査が必要となる。

## (3) キノコと樹木との関係

マツタケをはじめとするアカマツ林、ツキヨタケをはじめとするブナ林など、キノコと樹木との関係は密接なものが多い。県内の林相は本書により詳細に解説されているが、キノコとの関係で特に大切な林相は、神戸市や摂丹地方のアカマツ林やアカマツ・コナラを中心とした里山林、寺社の境内などに多いシイ・カシ林、県内各所にわずかに残るモミ林、氷ノ山方面のブナ・ミズナラ林、海沿いにわずかに残るクロマツ林や塩生植物の残る海岸などである。なお、県中北部に多いスギ・ヒノキなどの植林地は特定の種しか発生しない。また、キノコそのものの発生も少ない。

## (4) 兵庫県の希少種を代表するキノコ

全国的にみて稀であるが、県内で安定して発生している種としては、三木市や宍粟市などに発生するアケボノタケ、宍粟市などに残るキツネノサカズキ、神戸市北区のワカクサウラベニタケ等がある。特にワカクサウラベニタケは全国的にも報告例が少なく、県内発生地は全国屈指の発生地と考えられる。今回、唯一Aランクとしたタマリイグチは全国的にも珍しく、県内の発生確認地は1か所で、わずか10㎡程の範囲である程の範囲である。

## (5) 希少種であるがレッドデータ掲載種として選定しなかったキノコ

チョレイマイタケやヒメムラサキシメジ、イカタケ、その他多くの希少種が観察されているが、安定した発生とは言えないため今回はレッドデータブック掲載種として選定していない。近年、兵庫県南部で観察されたウラベニヤマイグチは、沖縄県以外での観察記録がない種であるが、兵庫県では珍しいとは言えず、今後の分布状況の推移を観察し、状況によっては次回更新時にレッドデータブック掲載種として加えられる可能性がある。毎年新聞紙上を賑わす神戸市北区のシイノトモシビタケや県中北部に発生したベニテングタケは、兵庫県としては貴重であるが、明らかに持ち込み種であるため除外した。環境省指定のレッドデータブック掲載種である

クロカワやコウボウフデ等は、兵庫県内では特に珍しいとは言えないので選定を外した。また、ブナ林内ではさほど珍しくない種も除外したが、今後ブナ林が減少を続けるとレッドデータブック掲載種としての選定が必要になるかもしれない。猛烈な勢いで減少するアカマツ林と深い関わりのあるマツタケなどの種も、やがてはレッドデータブック掲載種になると思われる。その他、カシノナガキクイムシ被害によるナラ・カシなどブナ科樹木の減少も危惧されており、同科樹木と菌根関係のある種も同様に減少が危惧されている。

#### (6) 稀少キノコの減少を止める方法

稀少キノコの発生地域における開発や道路の拡幅工事等において、工法等に留意することが重要と考えられる。また、身近な問題としては、里山管理として特定の樹木だけを残した伐採、風通しが良すぎる伐採などを行っている現地では、キノコを含め多様な生物が生育できる環境にも留意した管理手法について、実施者との話し合いが必要と考えられる。他には、酸性雨や地球温暖化などもキノコの発生環境に影響が有るが、県レベルの問題ではないのでここでは取り上げない。

#### (7) 今後の課題

前述したように、十分に調査ができた状態で本書に着手した訳ではない。よって今後も精力的に調査継続を実施して次回の発行に備えたい。兵庫県立人と自然の博物館等の協力を得て稀少種の標本を積極的に残して行くことは大切なことである。「キノコにおける絶滅の定義」や「キノコの保護についての具体策」などについては、まだ論議が不十分で統一的な見解が得られていないのが現状である。これらについて大学等専門機関による例示が待たれる。

#### あとがき

この度、兵庫県として初めて菌類をレッドデータブックに追加するという事で一からの出発でした。種の選定や分布状況などについて、数カ月に及ぶ論議や執筆等に参加して頂いた協力者方々に感謝申し上げます。

また、多大なご指導を賜りました(財)日本きのこセンター菌蕈研究所上席主任研究員長澤栄史氏をはじめ、鳥取大学農学部附属菌類キノコ遺伝子研究センター長前川二太郎教授ら、多くの先生方の助言なくして兵庫県版菌類レッドデータブックを完成させる事が出来ませんでした。

ここに謹んでお礼申し上げます。

(山上 公人)